

一つの世界の中のベトナム

——『ベトナムの世界史』刊行後 20 年——

古 田 元 夫

はじめに

筆者が 1995 年に東京大学出版会から刊行した『ベトナムの世界史』¹⁾ は、筆者のベトナム観をもっともまとまった形で提示した書物である。中華文明という普遍的な文明を体現した「普遍国家」として世界に自らを位置づけていたベトナムは、フランス植民地支配によって、伝統的な中華世界から切断され、ラオス・カンボジアとともにフランス領インドシナ連邦に組み込まれるなど、周辺の東南アジア世界との関わりを強めていく。1945 年に独立を宣言したベトナム民主共和国が、自らを東南アジアの「地域国家」として位置付けていたのは、こうした流れの延長にあった。しかし、フランス、ついでアメリカという大国を相手とした民族解放戦争を戦わざるをえなかったベトナムは、その個性を抑えても、自らが人類普遍の社会主義を体現する「普遍国家」であることを強調することで、ソ連や中国などの社会主義陣営の支援を確保する必要にせまられた。こうしたベトナムは、ドイモイの開始後、冷戦体制とソ連・東欧における社会主義体制の崩壊という事態の中で、人類普遍の社会主義を体現した「普遍国家」から、東南アジアという地域の中に自らを位置づける「地域国家」にふたたび変貌しつつある。こうしたベトナム史の概観を、『ベトナムの世界史』は行っている。これは、ベトナムの ASEAN 加盟が実現した 1995 年までのベトナム史の概観としては、今なお有効な議論だと考えているが、すでにこの本が出版された 1995 年から 20 年近くの時間が経過している。この間、ベトナムは、2007 年の WTO 加盟に象徴されるように、世界経済への一体化を強め、その中で比較的順調な経済発展を持続し、2008 年には国民一人あたりの GDP が 1000 ドルを超えて、貧困国から中進国（中規模収入国）になるなど、大きな変貌をとげた。政治体制では共産党の一方支配が持続はしているものの、市場経済が定着し社会全体が深い大規模な変化の過程にある。

そこで本稿では、『ベトナムの世界史』で行った、ドイモイ開始以降のベトナムのナショナル・アイデンティティの変化を、人類普遍の社会主義を体現した「普遍国家」から、東南アジアという地域の中に自らを位置づける「地域国家」への変貌という描き方が、その後 20 年あまりでベトナムが大きな変化をとげた今日、依然として有効かどうか

を、検証してみたい。

(1) ASEAN 中のベトナム

まず、ベトナムと ASEAN の関係を検討する。1995 年に ASEAN に加盟したベトナムは、いまではその成員として安定した地位を保っており、ベトナムが ASEAN の一員であり、「東南アジアの地域国家」であるという見方も、常識化している。2013～2017 年の ASEAN 事務局長は、レ・ルオン・ミン (Lê Luong Minh) という、ベトナムの外交官だが、これは、ASEAN にとっては異質な新参者で、英語が達者な人は外交官の中でも少ないので、ASEAN の活動をまともに担えるかどうか懸念されていた、1990 年代半ばの状況に比べると、隔世の感がある出来事である。

ベトナム自身も、自らの ASEAN 加盟の意義を高く評価している。2005 年に刊行された『ベトナム外交 1945～2000』は、公式の外交史だが、そこではベトナムの ASEAN 加盟は、次のように評価されている。

「ベトナムが ASEAN の正規加盟国となったことは、東南アジアにおける国際関係の大きな歴史的転換であり、東南アジアにおける平和、安定、協力、発展、共栄の趨勢を促進する重要な地域組織としての ASEAN の役割と地位を強化させた。ベトナムの ASEAN 加盟は、地域全体の発展の中でのベトナムの発展にとって有利な地域環境を形成するのに貢献し、東南アジアおよび国際舞台でのベトナムの地位と役割を高め、世界のその他のパートナーとの関係を拡大するのに有利な状況をつくりだした。正式なメンバーとしてベトナムは、ASEAN の各プロジェクト、共通の活動に十全に参加しており、コンセンサス、相互内政不干渉という原則を基礎とした、ASEAN 内部の団結、一致、協力の強化に、積極的に貢献している。」²⁾

この引用にもみられるように、ベトナムにとっての ASEAN 加盟の意義は、次の四点にまとめることが可能だろう。³⁾

まず第一に、ベトナムは ASEAN に加わることによって、東南アジア地域の一体化＝ASEAN10 の実現を促進し、ASEAN の国際的地位を高め、自らの経済発展に不可欠な平和な国際環境と、中国の台頭などにもかかわらず相対的に安定した安全保障上の環境を手にすることができた。

第二に、ASEAN 加盟は、ベトナムの APEC や WTO への加盟、東アジア共同体構想への参画など、ベトナムの国際的地位の向上に貢献した。

第三に、ASEAN はベトナムに経済発展のモデルを提供するとともに、ASEAN 自身の自由貿易圏に加えて、ASEAN を軸とする自由貿易圏が多角的に形成されたことにより、それに参加したベトナム経済のグローバル化を促進することになり、ベトナムの経済発展に貢献した。

第四に、ASEAN10の実現は、ASEAN内部に先発国と後発国の格差という問題を持ち込んだが、ASEANがこの格差是正をASEAN共同体実現のためには克服しなければならない課題としていることは、ベトナムに後発国の「牽引役」というASEAN内部での明確な役割を与えることになり、メコン圏開発など新たなチャンスベトナムにもたらしている。

表1は、ベトナムの輸出入におけるASEANの比重を示したものである。1980年代までのベトナムの主要な貿易相手だったソ連・東欧との関係が減少する中で、1990年代には大きかったASEANの比重が、その後はやや減少傾向にあることがわかるが、それでも東南アジアは、ベトナムにとって米国、EUに次ぐ第三の輸出先であり、中国に次ぐ第二の輸入元として、確固たる地位を占めている。第二次世界大戦以前、フランス本国への従属度が高く、1937年の数値で輸出の8.8%、輸入の9.4%を占めるに過ぎなかった⁴⁾東南アジアが、輸出で10%以上、輸入では20%近くを安定的に占めるようになったことは、「東南アジアの中のベトナム」の実体化と評価してよい出来事であろう。

表1 ベトナムの貿易の中のASEANの比重⁵⁾

ベトナムの輸出 (1995-2010)

年	1995	2000	2005	2010
米国	169.7	732.8	5924	14238.1
日本	1461	2575.2	4340.3	7729.7
中国	618.6	1852.3	3581.2	9207.1
EU	664.2	2845.1	5517	11385
ASEAN	996.9	2619	5743.5	10314.7
ASEAN%	18.29%	18.08%	17.70%	14.28%
総量	5448.9	14482.7	32447.1	72236.7

ベトナムの輸入 (1995-2010)

年	1995	2000	2005	2010
米国	130.4	363.4	862.9	3766.9
日本	915.7	2300.9	4074.1	9016.1
中国	748.7	1999.2	7134.7	21064
EU	710.4	1317.4	2581.2	6361.7
ASEAN	2270.1	4449	9326.3	16407.5
ASEAN%	27.84%	28.45%	25.37%	19.34%
総計	8155.4	15636.5	36761.1	84838.6

★単位は百万米ドル、ASEAN%は輸出総量に占めるASEANの比率

ASEANは、2008年に発効したASEAN憲章に基づき、2015年のASEAN共同体の発

足をめざして、その統合の度合いを増そうとしている。この新しい ASEAN のありかたをめぐっては、インドネシアやフィリピンなどの先発国からは、民主主義や人権などの普遍的規範の重視や、EU をモデルにした組織・意思決定方式の導入が主張されたのに対し、ベトナムを含む新規加盟国は、主権尊重・内政不干涉・コンセンサスといった従来の ASEAN Way の墨守を望む立場をとり、その結果、憲章は中途半端なものになっていることが指摘されている。⁶⁾

ASEAN Way は、ベトナムのような異質な政治体制をもつ国家が ASEAN に加盟するには重要な意味を持ったことから、ベトナムではなおその重要性を強調し堅持を重視する議論が多いことは事実だが、そのままでは ASEAN の共同体の深化がはかれないことを指摘する声も出されている。例えば、社会科学アカデミーの東南アジア研究所の所長のグエン・ズイ・ズン (Nguyễn Duy Dũng) 氏編の 2012 年に出版された本では、次のような指摘がなされている。

「これらの原則は、政治、経済、文化、社会の協力を促進するのには貢献してきた。しかし、ASEAN の統合と協力の過程がより高い水準へと移行しはじめると、新しい不一致が発生することは避けられない。ASEAN がこうした原則を掲げたのは、初期においては、経済発展の水準が異なる国々すべてを、一つの協力の枠組みへと結集するのに貢献したからである。実際にも、これらの原則は、協力と統合が低い水準にあった、相対的に短い期間のみ効果を発揮したのである。これらの原則そのものは、参加者を法的に拘束する基礎にはなりえず、必要な強制措置がないため加盟国の勝手な振る舞いと、地域機構としての『無力』という状況を導くことになる。」⁷⁾

2014 年 5 月に、ベトナムと中国の間で領有権をめぐって対立のある南シナ海 (ベトナムは東海と呼ぶ) のホアンサ (西沙) 諸島近海の、ベトナムが排他的経済水域と主張している海域に、中国が石油掘削リグを設置したことは、ベトナムからの強い反発を引き起こし、従来は抑止されていた大衆的な中国への大衆的抗議行動が、一時的ではあったが容認され、対中批判の声を直接あげることがなかった共産党も、強い抗議の姿勢を示すなど、それまでのベトナムの動きとは質的に異なる動きがあった。この南シナ海をめぐる情勢の緊迫に際して、5 月にミャンマーで開催された ASEAN の外相会議と首脳会議は、深刻な懸念を表明し、関係国の自制と紛争の平和的解決、および南シナ海の係争当事国の行動宣言の完全な履行と行動規範の早期策定を呼び掛けた。これは、2012 年のカンボジアで開催された ASEAN 外相会議では、南シナ海問題をめぐる ASEAN 内部の意見の対立から共同声明が出なかったことに比べると、中国のあまりに強硬な姿勢が、ASEAN 諸国を結束させる結果を招いたもので、ベトナムにとっては、安全保障面での ASEAN の一員であることの価値を明示した出来事だったといえよう。

しかし、中国がより強硬な動きに出て、それに反発する米国が対抗措置をとるなど、東南アジアをめぐる米中の対立がより激化するような事態になると、ASEAN 内部に自

らの安全保障を大国に依存して維持しようとする傾向を生み、ASEAN の分裂に至らざるをえない懸念は存在している。ベトナムのグエン・タン・ズン首相が、2013 年にシンガポールで、「われわれは、地域の平和と繁栄を築くために、すべての国と効果的に協力する、団結した力強い、一つの ASEAN が必要なのであって、成員各国が、諸大国との関係で、自らの個別的利益のために、こちらについたり、あちらについていたり、選ばなければならないような ASEAN を望んでいるわけではない」と強調しているのも、こうした懸念をふまえてのことであろう。⁸⁾

「単一の市場」と「単一の生産基地」をめざす ASEAN 経済共同体で、ベトナム産品が十分な競争力をもてるのか、産業集積が一部の国に集中する可能性がある中で、ベトナムでの産業集積がどこまでできるのかなど、経済面での試練も含め、ASEAN 共同体の深化は、「東南アジアの中のベトナム」に、多くの新しい課題を提起している。

(2) 残存社会主義同盟論からパートナー外交へ

もっとも、『ベトナムの世界史』では、1990 年代に入った時点で、ベトナムの「東南アジアの地域国家」としての歩みは固まっていたかのような議論をしているが、ベトナム外交の実際の展開からすれば、実際には 90 年代には、まだ冷戦時代の「二つ世界」観と社会主義国との関係を重視する考えが、なおベトナム共産党内部で、少なからぬ力をもっていたというべきであろう。⁹⁾

この「残存社会主義同盟」論とでもいうべき発想が、ベトナム共産党指導部の間で台頭したのは、東欧における社会主義体制が崩壊し、ソ連も動揺を強めていた、1990 年のことだった。この年の 9 月、ベトナム共産党書記長のグエン・ヴァン・リンと、ファム・ヴァン・ドン元首相らが、中国の成都で江沢民ら中国指導部と秘密裏に会談し、中越関係の正常化とカンボジア問題の解決について話し合った。この際、カンボジア問題に関して浮上したのが、中国が後押しするポル・ポト派と、ベトナムが支援するヘン・サムリン派の協力で事態の解決をはかる、俗に「赤い協力」と言われる方式だったが、これにとどまらず、ベトナム側からは、ソ連・東欧における社会主義体制の動揺・崩壊をふまえ、残存している社会主義国の連帯強化に中国が中心的役割を果たしてほしいという要請がなされたと言われている。この「残存社会主義同盟」論には、中国側は冷淡だった。それは、ベトナム共産党指導部には、ソ連・東欧に続いて中国でも社会主義体制が崩壊するような事態が起これば、ベトナムの社会主義はもたないだろうという判断があったのに対し、中国には、そのような発想はなく、「中国的社会主義」の建設にとっては、他国の動向は大きな影響をもたないと考えていたからだと思われる。結果として、91 年の中越関係の正常化は、「社会主義兄弟国」関係の復活ではなく、平和五原則という通常の国家間関係の論理による関係正常化として実現することになった。

中国が「残存社会主義同盟」に消極的であったことは、ベトナムの ASEAN 接近を促進することになった。また、カンボジア問題の「赤い解決」の浮上は、カンボジアのフン・セン首相らの強い反発を招き、カンボジア人民党のベトナム離れ、社会主義離れを促進し、結果として、ベトナムの安全保障にとって重要な意味をもつカンボジアとの関係に、社会主義という論理が介在しにくい構造もつくりあげることになった。

しかし、世界は帝国主義と社会主義という、対立する「二つの世界」から成り立っており、帝国主義への警戒を怠るべきではないという発想は、その後も時々台頭することがあった。ASEAN 加盟の最終局面でも、共産党政治局という最高指導部には慎重論が残っていたといわれ¹⁰⁾、また 99 年 9 月には、ほぼまとまりかけていた米越通商協定調印が、直前になってベトナム共産党政治局内から異論が出て延期されたという出来事が発生した。同年には、ベトナム共産党書記長のレ・カ・フイエウ共産党書記長の訪中で、中越関係が「長期安定、未来志向、善隣友好、全面協力」という 16 文字に定式化され、中越間の陸上、海上の国境画定条約締結の見通しがたつなど、中国との関係強化が目立つ時期だった。しかし、こうした時期にも、中国側は、「残存社会主義同盟」的発想には依然冷淡であり、また大国として台頭する中国への警戒心が、在外ベトナム人の扇動もあって、ベトナム国内でも大衆的に広がるようになり、ベトナム共産党・政府にとっても、中国との「過度」の友好は強調しずらくなった面もあった。2000 年には、遅れた米越通商協定調印も実現し、クリントン大統領が、米国大統領としてはベトナム戦争後はじめてベトナムを訪問するなど、「帝国主義」への警戒が、ベトナム外交の基調を揺るがすようなことにはならなかった。

むしろ、90 年代末に起きたアジア通貨危機は、ベトナムをいっそうグローバル化と地域統合へ向かわせることになった。2001 年に開催されたベトナム共産党第九回党大会では、ベトナムを世界経済、地域経済に「主導的」に統合させる必要性が強調された。この党大会では、ベトナムの経済が「社会主義志向市場経済」であるという規定が登場したが、これは、それまでのような、国民経済の内部に、国営経済のような社会主義的セクターと、個人経済や資本主義的経済などの民営の非社会主義的セクターが並存しているという考え方から、民営経済を含め「社会主義志向市場経済」の構成要素と見なす考え方への転換を示すものだったが、このベトナムの「社会主義志向市場経済」は、「社会主義世界経済」ではなく、グローバル化のもとでの統合度を高めている単一の世界経済の一部を構成するものと考えられるようになったわけである。

こうした変化をふまえて、外交政策の転換が明瞭になったのは、03 年 7 月に開催された共産党第九期第八回中央委員会総会だった。この総会では、米国や中国を含む大国との関係について、「各国のわが国に対する利益を互いに織りあわせて、対立、孤立、あるいは隷属といった事態に陥らないようにする」という発想から、イデオロギー面での「友と敵」という論理ではなく、課題や局面ごとの「パートナー」という論理で大国との関

係を律していくことを確認し、米中日などの大国の影響力をうまくバランスすることで、ベトナムの自律と安全を確保するという外交方針、つまりは「二つの世界」の「友と敵」という発想からの最終的な転換を行ったのである。¹¹⁾

「二つの世界」観から脱却し、グローバル化を強める「一つの世界」へベトナムを結び付けていくという方針は、07年のベトナムのWTOへの加盟によって、より決定的になったといっていよう。

2011年に開催された共産党の第一一回党大会では、91年の第七回大会で採択された綱領の改定が行われた。この改定には、この20年間のベトナム共産党の国際観の変化が、よく示されている。

91年綱領は、ベトナムの社会主義建設をめぐる国際環境の特徴を、次のようにまとめている。「時代の現在の段階の顕著な特徴は、平和・民族独立・民主・社会進歩のための各国人民の階級闘争、民族闘争が、激しく複雑に展開されているということである。社会主義は、現在、多くの困難、試練に直面している。世界の歴史は曲折を経ている。しかし、歴史の発展法則に従って、人類は最後には必ずや社会主義へと到達するであろう。」¹²⁾ この部分は、新しい2011年綱領では次のような文章になっている。「時代の現在の段階の顕著な特徴は、社会制度や発展段階の異なる国々が共存し、協力しつつ、国家、民族の利益のために激しく闘争し、競争していることである。平和・民族独立・民主・社会進歩のための各国人民の闘争は、多くの困難と試練に直面しているが、必ずや新たな発展をみせるだろう。歴史の進化の法則に従い、人類は必ずや社会主義に到達するであろう。」¹³⁾

新綱領は、人類が社会主義へと到達するであろうという展望は91年綱領から継承しているが、現代の基本的な特徴を、階級闘争や人民闘争ではなく、国家間の共存、協力と闘争、競争に置いている点で、91年綱領とは異なる書き方になっている。

また91年綱領では、世界で「社会主義と資本主義の矛盾が激しく展開されている」¹⁴⁾ という、「二つ世界」観を示す箇所があったが、新綱領では、「時代の現在の段階の顕著な特徴は、社会制度や発展段階の異なる国々が共存し、協力しつつ、国家、民族の利益のために激しく闘争し、競争していることである」という、多様な国々の共存、協力と競争という考え方が示されている。

外交政策に関して91年綱領は、「外交政策の目標は、社会主義に前進する祖国の建設と防衛に有利な国際的条件を整え、平和、民族独立、民主、社会進歩のための世界人民の共通の事業に貢献することである」としていた。¹⁵⁾ これに対して、2011年綱領のこれに相当する部分は、「国家と民族の利益、富強の社会主義国ベトナムのために、独立、自主、平和、協力、発展の対外路線を一貫して実現し、主導的、積極的に国際的統合に参加し、国の国際的地位を向上させる。国際共同体の信頼すべき友人、パートナーとなり、世界の平和、民族独立、民主、社会進歩の事業に貢献する」となっている。新綱領では、

「人民闘争」という観点をはずし、国家の外交政策という色彩をより強めたうえで、国際的統合への積極的関わりを重視しているわけである。

この部分に続けて、91年綱領は、「政治・社会体制の相違にかかわらず、平和共存の諸原則の基礎の上にあらゆる国々と平等、互恵の協力を行う」としている。¹⁶⁾ これは、第七回大会での「全方位外交」への転換を反映した部分で、この一節はそのまま今回の改定案にも継承されている。91年綱領は、この一節に続けて、「社会主義各国、インドシナ半島の兄弟国との伝統的な友好、協力関係をたえず強化し、発展させる」¹⁷⁾ という文章があったが、この部分は今回の改定案では削除された。2011年綱領の外交政策の部分で、具体的な国名、地域名があがっているのはASEANだけで、「ASEAN諸国とともに、東南アジアが平和、安定、協力、発展繁栄の地域となるよう奮闘する」としている。

「社会主義各国」との関係重視という表現がなくなったのは、「二つの世界」の「友と敵」という考え方からの訣別を示している。また、ラオス・カンボジアに関しては、80年代までは「特別な関係」で結ばれた「兄弟国」という位置づけがなされていた。現在のベトナムにとっても、この両国は、安全保障上きわめて重要な意味をもっているが、「社会主義兄弟国」という論理は使用されなくなっている。ラオスとの間では、「特別な関係」という表現が引き続き使用されているが、カンボジアとは王国の復活以降は「伝統的友好関係、全面的協力関係」という表現が使用されるようになっていく。さらに、両国との関係は、ASEAN内の後発国（CLMV）の連携という、ASEANの枠組みの中での協力という位置付けできるようになったことが、「インドシナ半島の兄弟国」という表現が、綱領からなくなった要因として考えられよう。¹⁸⁾ これにかわって、ASEANへの言及が綱領に入ったことは、「二つの世界」観を脱却して、「一つの世界」への統合を積極的に志向するようになったベトナムにとって、ASEANの一員、「東南アジアの地域国家」であることがもっている重要性を、象徴的に示していると言ってよいだろう。

こうした外交政策を反映して、ベトナムは、主要な国々との間の「戦略的パートナーシップ」の形成を重視している。「戦略的パートナーシップ」の合意は、ロシア（2001年）、日本（合意06年、確認09年）、インド（07年）、中国（08年）、韓国（09年）、イギリス（10年）、ドイツ（11年）、イタリア、タイ、インドネシア、シンガポール、フランス（以上、13年）などに広がっている。¹⁹⁾ また、米国とは13年に「全面的パートナーシップ」の合意に到達している。近年、中国が大国として台頭し、その南シナ海での領有権などをめぐり強硬な外交姿勢が目立つようになるに伴い、米国との関係を含むベトナムの「全方位外交」には、拍車がかかっていると見るべきであろう。

(3) ベトナムと東アジア

ベトナムの東南アジアの「地域国家」としての定位が、主に政治・外交・国際関係の

領域で進んでいる現象だとすると、文化的な領域では、ベトナムの東アジア性に改めて注目する議論が、21世紀に入って強まっている。

この東アジア性への注目は、ドイモイ開始後のベトナムにおける伝統の再評価と関係している。「普遍国家」から「地域国家」への転換は、ベトナムの個性への注目ということで伝統に対する再評価に結び付いていた。伝統の再評価は、社会主義の普遍モデルの優位性が強調されていた「普遍国家」時代には、政権によって抑圧されていた、村祭りなど、人々の間に根付いていた伝統が、ドイモイ開始後に抑圧がなくなるに伴って「復活」してきたという、いわば「下から」の再評価と、普遍的な社会主義イデオロギーの求心力の低下の中で、政権がその正統性の根拠をいままで以上にナショナリズムに求めるようになり、自らを「伝統の擁護者」として描き出そうとする、「上から」の伝統再評価の、二つの側面から成り立っている。²⁰⁾

中越戦争直後の中国との厳しい対立があった1980年代には、ベトナムの論壇では、ベトナムの伝統における中国の影響、東アジア性を極力否定し、かわって東南アジア性を強調する傾向が強かった。90年代には、こうした傾向は緩和されたものの、依然としてベトナムの東アジア性を強調することをタブー視する雰囲気が残っていた。筆者の『ベトナムの世界史』は、98年にベトナムでベトナム語版²¹⁾が刊行されたが、その際、出版社との間で一番問題になったのが、フランス植民地支配以前のベトナムを論じた第一章の「中華世界の中のベトナム」というタイトルだった。ベトナムの出版社からは、このタイトルは、「ベトナムは中国のもの」という意味に読者に受け取られる可能性があり、そう受け取られると、この本を読もうという人がいなくなってしまう恐れがあるという懸念が表明され、最終的には「地域世界の中のベトナム」というタイトルへの変更を余儀なくされたことがある。

ベトナムの研究者でベトナムの伝統文化の東アジア性の再認識を提唱した先駆的な議論としては、ベトナムは文化圏という角度で見れば東南アジアから東アジアへ移行したとする、94年のチャン・ディン・ヒュウ (Trần Đình Hượu) の議論²²⁾などをあげられるが、東アジア性を強調する議論が懸念なく展開されるようになるのは、2000年代に入ってからのように思われる。ベトナムを代表する大学であるベトナム国家大学ハノイ校が、「東アジア四大学フォーラム」という、東京大学、北京大学、ソウル大学とともに、東アジアという枠組みの中で大学教育を議論するフォーラムに正式に参加するには2000年だが、これはベトナムの論壇の空気の変化を象徴する出来事であったように思われる。²³⁾

このベトナムの伝統文化の東アジア性の再認識は、現在のベトナムで、伝統の重要性を強調すればするほど、「伝統との断絶」という問題を直視せざるをえないことによって、促進されているように思われる。その最も端的な問題は、ベトナム語のローマ字表記＝クックグーの定着により、漢字の知識が一般のベトナム人の間では完全に失われているということである。フランス植民地支配が、ベトナムの知識人を漢字から切り離

す役割を果たしたこと、ある段階からベトナムの知識人自身がベトナム語のローマ字表記を受け入れ、それをクォックグー＝国語と呼んで言語としての発展につとめたことは、『ベトナムの世界史』でも指摘したとおりである。それでも公文書がフランス語だったフランス植民地時代は、村のレベルでは漢字漢文の知識が温存されていたが、ベトナムの独立以降は、公文書もクォックグーで作成されるようになり、漢字漢文の素養は急速に失われていった。南北分断時代の南ベトナムでは、高校で漢字教育が一部で存続していたが、これもベトナム戦争の終結、南北統一の後に廃止され、ベトナム全土で初等中等教育では漢字が全く教えられないようになってすでに35年以上が経過している。識字人口の増大が課題だった時期には、覚えやすい表記法としてのクォックグーの優位性に対する疑問はあまり提示されなかったが、文字の普及という課題が基本的に達成されると、漢字知識の喪失という「伝統との断絶」に、改めて目が向くようになっていているわけである。²⁴⁾

漢字知識の喪失は、過去に漢字漢文によって書かれたものを、クォックグーの翻訳がないと読めなくなっているという問題だけでなく、今日なお語彙の65～70%を漢語起源の漢越語が占めているベトナム語の理解、言語的魅力、造語能力といった面で、困難を生じているという、現在の問題も生み出している。こうした状況で、一定の範囲の漢字教育を初等中等教育に復活させるべきだという議論が、言語研究者、国語教育者を中心に出されるようになってきている。特に、ベトナムでも近年、英語教育を小学校から始める動きが出ているが、英語を教えるぐらいならばまずは漢字を教えるべきだという議論も提起されている。²⁵⁾

いま一つの現代ベトナムにおける東アジア性への注目の背景は、儒教的な伝統やその他の「東アジア的な価値」が、ベトナムの現在の課題である経済発展に貢献するのではないかという期待であろう。ベトナムでは、西洋的な価値、あるいは現代世界で普遍的とされているものに対抗して「東アジア的価値」を強調する、「新アジア主義」的な議論はそれほど強くはないが、「家族の重視」、「集団意識の高さ」、「愛国精神と民族意識の高さ」、「勤労精神」、「学問と道徳の重視」、「自然との調和」といった「東アジア的価値」が、ベトナムの発展に資するのではないかといった議論は少なくない。²⁶⁾

現代ベトナムを代表する歴史学者のファン・フイ・レ氏(Phan Huy Lê、ベトナム歴史学会会長)は、ベトナム史における東南アジア性と東アジア性に関して、最も活発に見解を表明している研究者の一人である。レ氏は、ベトナムが歴史上、一貫して東南アジア文化圏に属していたとしつつ、中華文明の強い影響を否定せず、ベトナム史を次のように総括している。

「歴史の展開を見ると、私は、ベトナムが東南アジアから東アジアに、あるいは東南アジアから東アジア、そしてふたたび東南アジアと、その文化圏を転換したという見解には賛成できない。私の考えでは、ベトナムは、地理的な位置だけでなく、文化の基層と

いう点からみても、一貫して東南アジアの国家であった。しかしながら、かなり早くから、ベトナムは、中華文明の影響を受けた地域に位置し、中華文化の多くの影響を受容し、それによってインド文明の影響を受けた東南アジア世界からは分化して、東アジア世界と多くの共通性をもつようになった。」²⁷⁾

また別の論文では、レ氏は次のような言い方をしている。

「ベトナムは、もともとは、地理的位置だけでなく、南アジア文化 (Austro-Asiatic Culture) という基層を他の域内諸国と共有し、後にインド文化の影響を受け、中国文化の影響を受け、17世紀以降は西洋文化の影響を受けたという文化面でも、東南アジアの一国だった。古代、中世の歴史の展開の中で、中国文化の影響が増大し、ベトナムは、東アジア地域の各国と共通する属性を多くもつようになった。したがって、ベトナムは、地理と基層文化の面では東南アジアの一国だが、東アジアの文化的空間に位置していたとすることは、科学的な根拠がある見方であろう。」²⁸⁾

こうした議論を立てるレ氏は、一時ベトナムの歴史学界では厳しく批判されていた、ベトナムの「中国化」という概念についても、一定の範囲ではその妥当性を認めてもよいとしている。

「東アジア地域では、中国文明-文化が重要な役割を果たした。これは、中国文明-文化に直接の影響を受けた地域であり、これらの影響こそが、東アジア文化に、特に文字と儒教という面で、そしてそこから派生して詩歌、芸術、政治制度、宗教信仰などに及ぶ、多くの共通性をつくりだすのに貢献した。この事実から、中国学者の中には、東アジアとは『中国化した地域』あるいは『中国化した世界』であるとする人がいる。この『中国化』という概念は、多くの国の研究者の間で長期にわたる論争を引き起こしてきた。私の考えでは、もし中国化を、中華文化の影響を受けた地域と理解するならば、それは認めなければならない一つ歴史的事実であり、深く研究されなければならない課題であるが、もし中国文化に同化されてしまった地域と理解するならば、それは正しくない。」²⁹⁾

レ氏は、このような観点から、漢字文化をベトナムの貴重な伝統として、継承・発展させる必要性を強調する。レ氏も、初等中等教育における漢字教育復活の積極的提唱者の一人である。

「漢字は、ベトナムではもはや使用されなくなっているが、民族の巨大な文化的遺産が、漢字や字喃で書かれており、現在のベトナム語でも、言語学者の統計によれば、65%あまりが漢越語で、漢字に関する必要最小限の認識がないと、これらの漢越語についての深い理解ができない。したがって、多くの研究者が、研究をして漢越科目を初等中等教育のカリキュラムに導入すべきだという建議を行っている。これは、クォックゲーにかわって漢字を復活させるためではなく、若い世代に、漢越語の起源と意味を理解させようとするためのものである。」³⁰⁾

「古典教育とともに、漢越語の語源、構造、語義に関するカリキュラムが、きわめて必

要である。このカリキュラムは、初等中等教育に導入されるべきである。この問題について多くの研究者が長きにわたって声をあげてきたが、残念ながら今日に至るまでまだ実現されていない。…喜ばしい現象の一つは、最近、漢字を勉強することが、社会が関心を寄せる人々の需要となっていることである。一部の文化機関や村の古老によって、漢字教室が自発的に組織されており、多くの人々の参加をえている。漢字・字喃文学の宝庫の中には、ある程度の漢字・字喃の水準があってはじめて、今日の文化発展の中で開拓し、継承し、その意義を発揮しうる古典的作品が数多く存在する。このようにベトナムにおける古典教育は、漢字・字喃からクォックグーに文字が変化したことによって生じた、文字の断絶という、漢字・字喃およびその文化遺産についての大きな問題に関連しており、民族の文化遺産全体の継続的発展、およびその継承と今日的意義の発揮を保証するような解決方法が必要とされている。」³¹⁾

レ氏は、漢字の伝統と同時に「東アジア的価値」の今日的意義を説く論者の一人であるが、「東アジア的価値」の絶対化、固定化には、警戒の目を向けている。

「東アジアの諸価値にも、歴史的な浮き沈みがあり、常に、それぞれの時代の状況のもとで国土と地域の発展の要請に適合すべく、高められ刷新されるべきものだった。東アジア的価値を絶対化したり、他から孤立させるべきではない。つまるところ、すべての価値は、歴史と生活の産物であり、歴史が新たな段階に発展し、生活が変化すれば、価値も変化しなければならず、時代遅れになった諸価値は改編されたり、高められたり、あるいは、歴史の発展の要請、人間の創造、文化の交流関係の中で、新たに生まれた価値にとって代わられる必要がある。」³²⁾

以上のようなレ氏の議論は、今日のベトナムの論壇の中では、ベトナムの東アジア性を重視する方に属する見解であるが、そのレ氏も、ベトナムの基層文化の東南アジア性を主張している。こうした議論に対しては、「東南アジアに共通する文化的基層」がいったい何であるかが明らかでなく、東アジア性を論ずる指標が明確であるのに対し、東南アジア性の指標は曖昧模糊としているという批判が存在している。³³⁾ このような批判にもかかわらず、レ氏が、ベトナムの東南アジア性にこだわるのは、東アジア性のみに注目すると、それは、今日のベトナムを構成する諸民族の中で、伝統的に中国的な文化を受容してきたキン族（ベトナムの多数民族、狭義のベトナム人、キンは漢字で表記すると京であり、キン族とは、文明の光に照らされた「みやこ人」であり、文明の光のあたらない「蛮人」とは区別される人々という意味だった、ここでいう文明とは中華文明であった）だけの伝統になってしまい、ベトナムの文化的多様性を否定し、ひいては多民族国家としてのベトナムの統合を危うくしかねないという背景があるからのように思われる。レ氏は、キン族の歴史になってしまう「東アジア的ベトナム」の歴史をベトナム史とすることに反対して、古代史でも、後のベトナムに直結するドンソン文化だけでなく、今日の地理でいえば中部ベトナムに展開したサーフィン文化とチャンパー、南部ベ

トナムに展開したオケオ文化と扶南という、三つの要素から成り立つベトナム古代史を提唱している。また、北部の大越国と、中部のチャンパー王国がともに栄えた10～15世紀を、ベトナム史の最も文化が栄えた時代とする歴史観も提起されている。³⁴⁾

こうしたベトナム史の「多元性」を重視する議論は、少数民族のエスニシティを尊重し、文化的多元主義の色彩をもっている、ドイモイ以降のベトナムの少数民族政策には適合的である。ベトナムの少数民族問題は、むしろ、経済発展の中で日常生活の均質化が急速に進展し、これまで貧しさが「保証」してきた文化的多様性が、危機に瀕しているところにあるのかもしれない。³⁵⁾

今一度レ氏の議論に立ち帰ると、そこでは、ベトナムの東南アジア性と東アジア性が、きわめて微妙なバランスをしている。これは、レ氏の議論に固有の問題というよりも、現代ベトナムの地域的定位に共通する問題といってよいだろう。

このような問題が存在している時に、ASEANを包摂する形で「東アジア共同体」構想が浮上してきたことは、ベトナムが、東南アジアか東アジアかという二者択一をせまられないですむ状況を作り出したという意味では、幸いしたといってよいだろう。東南アジアと東北アジア＝本稿でいう東アジアを含む「東アジア共同体」は、ASEANの一員であると同時に歴史的な東アジア性をもつベトナムにとっては、その中で東南アジアと東アジアをつなぐ「架け橋」の役割を発揮しうる構想である。レ氏も次のような指摘をしている。

「現在の地域化（＝地域統合の意味、引用者）とグローバル化の趨勢の中で、東南アジアの一国でありながら東アジア世界と多くの共通性をもつベトナムにとっては、ASEANの一員として東南アジアに自らを統合する一方で、東アジア諸国との交流と協力を拡大し、発展させることが、歴史と法則に合致した発展の趨勢である。」³⁶⁾

さて、この引用の冒頭で、レ氏が「地域化とグローバル化」を併記していることは、注目に値する。ベトナムでは、「地域化」(khu vực hóa)と「グローバル化」(toàn cầu hóa)は、基本的には同一の連続的な世界的風潮として把握されている。つまりは、ベトナムが東南アジア地域の一員としての性格を強めること＝「地域化」は、ベトナムの「グローバル化」への積極的参与の一部と認識されているのである。別の言い方をすれば、ベトナムが「地域国家」となるのは、人類のグローバルな普遍的風潮に自らをあわせているのであって、人類的普遍に個別的な地域性をもって対峙しようとしているわけではないのである。ベトナムにとっては、東南アジアとか東アジアという地域性は、自らを他の世界と区別する閉鎖的枠組みをしつらえることなく、むしろ自らを世界に結び付ける回路を設定するものとみなされているといってよいだろう。ここには、地域ごとの自由貿易圏が次々に生まれるようになり、「地域化」自身がグローバルな流れになっている21世紀の趨勢を敏感に反映しているともいえよう。

さらにこうした特徴は、東南アジアという地域性の歴史的特質とも関連しているよう

に思われる。東南アジアという地域性は、それが歴史上、特定の文明や帝国の枠組みになっただけでなく、自己完結的、閉鎖的な枠組みではなく、インド洋貿易圏や環シナ海貿易圏などのようなより大きな世界の中に位置づけられることによって意味をもった、開放的な地域枠組みだった。今日の ASEAN が、ASEAN+X という、域外諸国を加えたより大きな枠組みへの関与に積極的なのは、こうした歴史を反映しているともいえる。今日の ASEAN が体現し、ベトナムも自らをその中に位置づけようとしている東南アジアという地域性も、自己完結的、閉鎖的なものではない。³⁷⁾

このように、「東南アジアの地域国家」という自己定位は、「一つの世界」という普遍性の中に自らを位置づけていこうとする志向と、矛盾しているわけではない。同じようなことは、現在のベトナムが掲げる「社会主義」をめぐるとも言えそうである。

「東南アジアの地域国家」としてのベトナムは、ベトナムの個性に適合した「ベトナム社会主義」を志向するようになったというのが、『ベトナムの世界史』での議論だった。しかしながら、この「ベトナム社会主義」にも、なお普遍性がこめられていることも、見ておかなければならないだろう。それは、ベトナム共産党が、今なお、「ホーチミン思想」に加えて、「マルクス・レーニン主義」を「党の思想的基盤」としているというだけの問題ではなく、ソ連・東欧における社会主義体制の崩壊により、ソ連型の社会主義モデルの有効性、普遍性が否定された後は、それぞれの国や民族の個性に適合した「〇〇的社会主義」を求め、社会主義のモデルの多様性を承認することが、人類的な規模での社会主義の道の模索の普遍的特徴になっていると、ベトナムでは認識されている。³⁸⁾

ベトナム共産党は、社会主義志向といっても、どのような国造りをめざしているのかわかりにくいという声に答えて 1994 年から、自らがめざす社会主義像を示すスローガンとして、「民が豊かで、国が強く、公平で文明的な社会」を掲げた。この標語は、その後、2001 年に、「民主的」という言葉が加わって、「民が豊かで、国が強く、公平で民主的で文明的な社会」となり、2011 年には「民主的」の位置が前に来て、「民が豊かで、国が強く、民主的で公平で文明的な社会」となり、現在に至っている。

このスローガンに使われている用語には、あまり「ベトナム的」なものではなく、民主、公平、文明といった、きわめて普遍的な概念が使われている。ここで、民主とか、公平が強調されていることから、ベトナム共産党は、20 世紀には先進国のモデルでしかなかった「社会民主主義」の第三世界版を追求しようとしているといった見方も不可能ではない。

ベトナムの現実には、まだこの第三世界版「社会民主主義」モデルのようなものを説得的に提示するような段階には至っていない。この点では、『ベトナムの世界史』で述べたように、ベトナムで掲げられている「社会主義」という看板は、なお資本主義的發展への「割り切れなさ」を反映している段階にあるともいえる。ベトナムの掲げる社会主義が、普遍性をもつ新しいモデルの提示に結実するのか、共産党の一党支配を根拠づける

理由でしかなく、やがては終焉の時を迎えるのかは、今後の動向にかかっている。

それはともかくとして、ベトナムが「東南アジアの地域国家」として「一つの世界」への統合を強めるにしたがって、上述のスローガンの中での「民主」の位置があがってきていることは、注目に値すると思われる。共産党支配の批判者からは、これは一党支配を隠蔽するポーズにすぎないという批判もあるが、ASEAN の統合の深化とともに強調されるようになっていく民主主義や人権という普遍的な価値に、少なくとも前向きの姿勢をとる必要はあり、共産党も考えるようになっていくと思われる。このような意味では、この 20 年あまりの「東南アジアの地域国家」としての歩みの中で、ベトナムは、新しい普遍性への接近の試みも開始していると言えるのではなかろうか。

注

- 1) 拙著『ベトナムの世界史』東京大学出版会、1995 年。
- 2) Nguyễn Đình Bìn chủ biên, *Ngoại Giao Việt Nam 1945–2000*, Nhà xuất bản Chính trị Quốc gia, 2005, tr.351.
- 3) ベトナムにとっての ASEAN の意義、ASEAN の中でのベトナムの役割に関して包括的に論じたベトナムで出版されている著作として、Trung tâm Dữ kiện-Tư liệu Thông tấn xã Việt Nam, *Vai Trò của Việt Nam trong ASEAN*, Nhà xuất bản Thông tấn xã, 2007, Nguyễn Duy Dũng chủ biên, *ASEAN từ Hiệp Hội đến Cộng Đồng: Những Vấn Đề Nổi Bật và Tác Động đến Việt Nam*, Nhà xuất bản Khoa học xã hội, 2012 などがある。また社会科学アカデミー東南アジア研究所発行の研究誌 *Nghiên Cứu Đông Nam Á* にも関連論文が多数掲載されている。
- 4) 逸見重雄『佛領印度支那研究』日本評論社、1941 年、322 頁。
- 5) ベトナム統計総局のホームページによった。<https://gso.gov.vn/Default.aspx?tabid=706&ItemID=13412>
- 6) 山影進編『新しい ASEAN——地域共同体とアジアの中心性を目指して——』アジア経済研究所、2011 年参照。
- 7) Nguyễn Duy Dũng, *sách đã dẫn*, tr.82–83.
- 8) Nguyễn Tấn Dũng, Xây dựng lòng tin chiến lược của châu Á, Phát biểu đề dẫn tại Đối thoại Shangri-la lần thứ 12.
- 9) 1990 年代以降のベトナム共産党、政府の対外認識、外交政策については、白石昌也編著『ベトナムの対外関係』暁印書館、2004 年、中野亜里『現代ベトナムの政治と外交』暁印書館、2006 年、David W. Elliott, *Changing Worlds: Vietnam's Transition from Cold War to Globalization*, Oxford University Press, 2012などを参照。
- 10) “Vô Văn Kiệt và những quyết định lớn,” Nguyễn Văn Tuấn web, 11–6–2008, <http://nguyenvantuan.net/online-vip/908-v0-van-kiet^va-nhung-quyet-dinh-lon?tmpl>
- 11) Nguyễn Hồng Giáp, “Phát triển quan hệ với các nước lớn trong chính sách ngoại giao mới của Đảng và nhà nước ta,” *Nghiên Cứu Quốc Tế*, số 2 (61), 6–2005, tr.33.
- 12) Đảng Cộng sản Việt Nam, *Văn Kiện Đại Hội Đảng Thời Kỳ Đổi Mới*, Nhà xuất bản Chính trị Quốc gia, Hà Nội, 2005, tr.314.
- 13) 2011 年綱領の引用は以下によった。“Cương lĩnh xây dựng đất nước trong thời kỳ quá độ lên chủ nghĩa xã hội (Bổ sung, phát triển năm 2011),” Báo điện tử Đảng Cộng sản Việt Nam, <http://123.30.49.74:8080/tiengviet/tulieuvankien/vankiendang/details.asp?topic=1918&sul>

- 14) Đảng Cộng sản Việt Nam, *sách đã dẫn*, tr.313.
- 15) *Sách trên*, tr.326.
- 16) *Sách trên*, tr.326.
- 17) *Sách trên*, tr.326.
- 18) この点に関しては、レ・ボ・リン「日本・CLMV 関係」古田元夫編『ASEAN 新規加盟国の「中進国」ベトナムと地域統合——日越関係を視野に入れて』（科学研究費研究成果報告書）2011 年、184～205 頁参照。
- 19) 日本とベトナムの「戦略的パートナーシップ」樹立の経緯を含め、ベトナム外交にとっての「戦略的パートナーシップ」の意義を扱った優れた論文としてヴー・ティエン・ハン『日越戦略的パートナーシップの形成過程——1992 年から 2009 年の両国関係を中心に——』東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 2012 年度修士論文がある。
- 20) この点に関しては、拙著『ベトナムの現在』講談社新書、1996 年の第七章「復活するムラ」を参照。
- 21) Furuta Motoo, *Việt Nam trong Lịch Sử Thế Giới*, Nhà xuất bản Chính trị Quốc gia, 1998.
- 22) Trần Đình Huợ, *Đến Hiện Đại từ Truyền Thống*, 1994.
- 23) 東アジア四大学フォーラムについては、拙稿「東アジアにおける共通教養教育をめざして」片岡幸彦・幸泉哲紀・安藤次男編『グローバル世紀への挑戦』文理閣、2010 年、232～244 頁参照。
- 24) 近代ベトナムにおける漢字をめぐる問題については、岩月純一「近代ベトナムにおける『漢字』の問題」村田雄二郎、C・ラマル編『漢字圏の近代』東京大学出版会、2005 年、131～147 頁参照。
- 25) この点に関しては以下のような論文を参照。Cao Xuan Hao, *Tiếng Việt, văn Việt, người Việt*, Nhà xuất bản Trẻ, 2003, Nguyễn Đình Chú, “Cần khẩn trương khôi phục chữ Hán trong nhà trường phổ thông Việt Nam,” *Tạp chí Hán Nôm*, số 2–2005, Nguyễn Quang Hồng, “Chữ Hán chữ Nôm với thể hệ trẻ,” *Ngôn Ngữ và Đời Sống*, số 12, 2008, Vũ Văn Dân, “Có nên dạy chữ Hán ở trường phổ thông?,” web Văn Nghệ Quân Đội, 11–10–2010, http://vannghequandoi.com.vn/index.php?option=com_content&view=article&id=6126
- 26) Phan Huy Lê, “Giá trị Đông Á trong tiến trình lịch sử,” *Lịch Sử và Văn Hóa Việt Nam Tiếp Cận Bộ Phận*, Nhà xuất bản Giáo dục, 2007, tr.1006（この論文は 2002 年に発表されたものなので、以下 Phan Huy Lê 2002）。
- 27) Phan Huy Lê, “Việt Nam trong quan hệ với Đông Nam Á và Đông Á,” *Sách trên*, tr.1001（本論文は 2003 年に発表されたものなので、以下 Phan Huy Lê 2003）。
- 28) Phan Huy Lê 2002, *Sách trên*, tr.1006.
- 29) Phan Huy Lê 2003, *Sách trên*, tr.1002–03.
- 30) Phan Huy Lê 2003, *Sách trên*, tr.1004.
- 31) Phan Huy Lê, “Đa dạng văn hóa và giáo dục cổ điển từ góc nhìn Việt Nam” これは 2007 年 11 月東京大学で開催された東アジア四大学フォーラムでのレ氏の報告である。
- 32) Phan Huy Lê 2002, *Sách đã dẫn*, tr.1006.
- 33) Trần Ngọc Vương, “Việt Nam trong bối cảnh Đông Á của tiến trình hiện đại hóa,” 3–2007, Văn Hóa Nghệ An web, <http://vanhoanghean.com.vn/van-hoa-va-doi-song-quanh-ta/1908>
- 34) Phan Huy Lê, “Tinh đa tuyến, toàn bộ, toàn diện của lịch sử Việt Nam,” *Lịch Sử và Văn Hóa Việt Nam Tiếp Cận Bộ Phận*, Nhà xuất bản Giáo dục, 2007, tr.11–33.
- 35) 最近のベトナムの少数民族社会の変動を観察したすぐれた研究として、伊藤正子『民族という政治——ベトナム民族分類の歴史と現在』三元社、2008 年、伊藤未帆『少数民族教育

- と学校選択——「民族」資源化のポリティクス』京都大学学術出版会、2014 年などを参照。
- 36) Phan Huy Lê 2003, *Sách đã dẫn*, tr.1005.
- 37) 若手歴史学者のグエン・ヴァン・キム氏は、外世界からの影響のみを重視したり、逆に内発的發展のみを強調するような「極端な」東南アジア像からの脱却を提唱して、次のように指摘している。「東南アジア文化の外來性を強調する伝播論 (Diffusionism) と、東南アジアの内在性、創造力を強調する自生論 (Autochtonism) の論争がどんなに激しくても、現在の研究成果は、東南アジア社会に関する極端な見方は、その表現という面でも本質という面でも、歴史の現実から乖離した不適切なものであると考えられる。東南アジア文化の形成と発展は、多方向の関係、交流、相互作用の中で展開されたといえよう。東南アジアの諸社会は、内在的な価値の上に発展すると同時に、外部の大文明から多くの影響を受容してきた。それにとどまらず、東南アジアは、中心部と周縁部の間の文化の結合と転移の役割を果たしてきた。」Nguyễn Văn Kim, “Văn minh và đề chế nhìn lại con đường phát triển của các quốc gia Đông Á,” *Nghiên Cứu Lịch Sử*, số 2–2010 (406), tr.12. こうした「開放的」な東南アジア観が広がれば、ベトナムの東南アジアの「地域国家」としての定位は、より安定した基盤をもつことになろう。
- 38) 比較的最近のベトナムにおける社会主義像を検討した文献として、Nguyễn Xuân Thắng, Vũ Văn Phúc, Phạm Văn Đức, Nguyễn Linh Khiếu đồng chủ biên, *Văn Kiện Đại Hội XI của Đảng—Một Số Vấn Đề Lý Luận và Thực Tiễn*, Nhà xuất bản Khoa học xã hội, 2012 などを参照。

引用文献リスト

- 伊藤正子『民族という政治——ベトナム民族分類の歴史と現在』三元社、2008 年
- 伊藤未帆『少数民族教育と学校選択——「民族」資源化のポリティクス』京都大学学術出版会、2014 年
- 岩月純一「近代ベトナムにおける『漢字』の問題」村田雄二郎、C・ラマール編『漢字圏の近代』東京大学出版会、2005 年
- ヴー・ティエン・ハン『日越戦略的パートナーシップの形成過程——1992 年から 2009 年の両国関係を中心に——』東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 2012 年度修士論文
- 白石昌也編著『ベトナムの対外関係』暁印書館、2004 年
- 中野亜里『現代ベトナムの政治と外交』暁印書館、2006 年
- 逸見重雄『佛領印度支那研究』日本評論社、1941 年
- 古田元夫『ベトナムの世界史』東京大学出版会、1995 年
- 古田元夫『ベトナムの現在』講談社新書、1996 年
- 古田元夫「東アジアにおける共通教養教育をめざして」片岡幸彦・幸泉哲紀・安藤次男編『グローバル世紀への挑戦』文理閣、2010 年
- 山影進編『新しい ASEAN——地域共同体とアジアの中心性を目指して——』アジア経済研究所、2011
- レ・ボ・リン「日本・CLMV 関係」古田元夫編『ASEAN 新規加盟国の「中進国」ベトナムと地域統合——日越関係を視野に入れて』(科学研究費研究成果報告書) 2011 年
- David W. Elliott, *Changing Worlds: Vietnam's Transition from Cold War to Globalization*, Oxford University Press, 2012
- Cao Xuân Hạo, *Tiếng Việt, văn Việt, người Việt*, Nhà xuất bản Trẻ, 2003
- Đảng Cộng sản Việt Nam, *Văn Kiện Đại Hội Đảng Thời Kỳ Đổi Mới*, Nhà xuất bản Chính trị Quốc gia, Hà Nội, 2005
- Furuta Motoo, *Việt Nam trong Lịch Sử Thế Giới*, Nhà xuất bản Chính trị Quốc gia, 1998

- Nguyễn Duy Dũng chủ biên, *ASEAN từ Hiệp Hội đến Cộng Đồng: Những Vấn Đề Nổi Bật và Tác Động đến Việt Nam*, Nhà xuất bản Khoa học xã hội, 2012
- Nguyễn Đình Bin chủ biên, *Ngoại Giao Việt Nam 1945–2000*, Nhà xuất bản Chính trị Quốc gia, 2005
- Nguyễn Đình Chú, “Cần khẩn trương khôi phục chữ Hán trong nhà trường phổ thông Việt Nam,” *Tạp chí Hán Nôm*, số 2–2005,
- Nguyễn Hồng Giáp, “Phát triển quan hệ với các nước lớn trong chính sách ngoại giao mới của Đảng và nhà nước ta,” *Nghiên Cứu Quốc Tế*, số 2 (61), 6–2005
- Nguyễn Quang Hồng, “Chữ Hán chữ Nôm với thế hệ trẻ,” *Ngôn Ngữ và Đời Sống*, số 12, 2008
- Nguyễn Văn Kim, “Văn minh và đế chế nhìn lại con đường phát triển của các quốc gia Đông Á,” *Nghiên Cứu Lịch Sử*, số 2–2010 (406)
- Nguyễn Xuân Thắng, Vũ Văn Phúc, Phạm Văn Đức, Nguyễn Linh Khiếu đồng chủ biên, *Văn Kiện Đại Hội XI của Đảng—Một Số Vấn Đề Lý Luận và Thực Tiễn*, Nhà xuất bản Khoa học xã hội, 2012
- Phan Huy Lê, *Lịch Sử và Văn Hóa Việt Nam Tiếp Cận Bộ Phận*, Nhà xuất bản Giáo dục, 2007
- Trần Đình Hượu, *Đến Hiện Đại từ Truyền Thống*, 1994.
- Trung tâm Dữ kiện-Tư liệu Thông tấn xã Việt Nam, *Vai Trò của Việt Nam trong ASEAN*, Nhà xuất bản Thông tấn xã, 2007